

動詞について ②

○あらわれる (あらわれでる) / あらわす (あらわれだす)

自動詞では、その動作・作用はそれ自身として表されるので、とりあえず「あらわれる」(「あらはれる」)の一語で、意味のまとまりとして完結していると考えられる。その上で、どのような助詞が付されて、補足説明されているのであろうか。

まず、格助詞「が」の場合は、「神が」(一号3、三号53、五号46、十三号92)、「ね(根)が」(三号90)、「しんの心が」(十二号177)が挙げられる。また、「でる」が加えられた「あらわれでる」においては、「月日が」(十三号31)、さらに「はじめる」が加えられた「あらわれはじめる」においては、「をやが」(十五号11)と記されている。こうして格助詞「が」に着目すると、「あらわれる」という作用で示されている当のものは、第一に「神」「月日」「をや」、第二に「心」、第三には比喩的な意味合いが強い「ね」であると解される。ちなみに、十二号177の「しんの心が」の歌に続く「この心あらわれでたる事ならば」(十二号178)の「この心」には格助詞は付されていないが、同様にそれが作用主体を示していると解される。また、「みな」(一号44、二号44)は「が」の省略とも取れるし、副詞的にも解釈され得る。さらに、「いかな心も」(一号44)と副助詞「も」が付されている場合もあるが、ここでの「も」は並列というより、「いかな」と呼応して「いかな心であっても」と強意を意味していると解され、やはり「心」を作用主体としているといえよう。

さて、そうして作用主体は主に格助詞「が」によって示されるが、他の助詞に注目すると「あらわれる」の別の性格が見出される。まず、「をもてい(「へ」:i音とe音の交替)」(一号3、三号53、六号60、十三号92)と「へ」が付されている場合。格助詞「へ」はその動作・作用の方向や帰着点を示しているが、ここではそうした方向や場所が「をもて(表)」とされる。一号3の「このたびハ神がをもていあらはれて」の場合は、前首の「といてきかした事ハない」を受けて、「なにかいさいをといてきかする」という目的をもった「おもてい」「あらわれる」と解される。つまり、「あらわれる」主体は「はなしする」主体でもある。「どうよぢぎいにはなしする」と続く十三号92も、これとほぼ同様の意味であるといえよう。

次に、三号53では、前首の「神がほふけ(箒)や」を受けて、「神がをもていあらわれて」「そふちする」と歌われており、「をもてい」「あらわれる」ことのイメージとして、「神」による「掃除」が描かれている。そこで、「あらわれる」主体はまた「そうじする」主体であるともいえよう。そして、六号60の「をもていあらはれて」は、その後の62の歌で「このたびハあかいところい(へ)でたるから」と「でる」という語で言い換えられて、「をもて」が「あかいところ」として示されている。下の句で「どのよな事もすぐみえるで」と歌われていることから、そうして「あかいところ」へ「あらわれる」ことの現前性が「みえる」ことの明瞭性に結びついているといえよう。

ここで注意を引くのは、続く63で、「あかいところい」「でた」という事態が、赤衣という物質性・具象性に対しては「なかに

月日がこもりいる」と歌われて、「おもて」に対して「なか」「でる」に対して「こもりいる」とそれぞれ対照的な表現が用いられている点である。つまり、「あらわれる」という語句で示される動作・作用は、赤衣という具体物における象徴性を担うときには「あらわれる」とは語義の上で反対の表現形式を持つといえる。

このような「へ」に加えて、「月日より」(十一号24、十一号67)と「より」が付されている場合もある。「より」は、比較の基準を示すこともあるが、ここでは動作の起点・経由・理由を示すものとして捉え得る。つまり、その意味としては「から」に近く、「あらわれる」という動作・作用が及ぶ先は「へ」でマークされているが、その起点を示すものとして「より」が用いられているといえよう。ここではそうした起点が「月日」と述べられている。先述したように、「月日」は助詞「が」をともない「あらわれる」の作用主体としても登場しているが、同時にそうした作用の起点としても位置づけられている。ただし、24では「月日よりあらはれでるとゆうたとて」と、「月日より」は「ゆう」に一あるいは両方に一掛かっているとも解釈できる(たとえば十三号14参照)。なお、67においては、「こゝで」と格助詞「で」も付されて、時間的限定を伴う「このたび」とともに、「あらわれる」の場所的な限定を示している。

最後に助詞「は」を伴う場合について見てきたい。まず「は」は多くの場合時間的な表現とともに用いられている。「いまゝでハ」(五号46)、「このたびハ」(一号3、六号60、132、十三号92)、「これからハ」(三号53)。また、「あすにちハ」(十二号177)も含められるかもしれない。助詞「は」には、文中のその要素を際立たせることで、文外の別の要素についても暗示するという機能(「とりたて」)がある。そこで、これらの「は」を伴う時間表現は、たとえば「このたび」を際立たせることで「いままで」では“ない”ことを含意するように、相互に参照し合っている。ただし、「あらわれる」は、その作用の本性上「いままで」(過去)に対してよりも、「このたび」や「これから」と親和性が高い。そのため五号46の「いまゝでハ」は、「あらはれでたる」よりも同首の下の句の「しりたものなし」との結びつきが強いといえる。助詞「は」を伴う「このたび」や「これから」などの時間表現は、「あらわれる」という事態をよりいっそう確かなもの(六号60)として強調しているといえよう。

また、助詞「は」は、「善とあくはみなあらはれる」(二号44)でも登場している。この歌では、「あらわれる」の作用主体はかろうじて「みな」で示されており、「善とあく」は、そうした事態が生じる際の主題を示しているといえよう。つまり、「善とあく」は「あらわれる」ことそのものに関わるというより、「あらわれる」ことによって一そこにおいて・それを介して一示される何かである。とりわけ、この歌の上の句で「たんへと十五日よりみえかける」や、前の句で「神のりいふくみへてくるぞや」と歌われており、「あらはれる」ことが「みえてくる」ことの明瞭性と結び付けられて説かれている。「善とあく」は、「あらわれる」事態において、「みえてくる」といえよう。